

蓮如「御文」の語学的検討——(四)文末——

矢毛達之

キーワード：蓮如、「御文」、「五帖御文」、「ナリ」、「ベキモノナリ」、「アナカシコ」

内容

はじめに

一 『五帖御文』の文末と「…ナリ」について

二 『五帖御文』の「モノナリ」「コトナリ」

三 『五帖御文』の「ベキモノナリ」附「アナカシコく」

おわりに

はじめに

これまで、三回にわたり蓮如「御文」の文章について検討を加えてきた^①。今回は、前稿で採り上げた文頭の語句に、日本語の特性上勝るとも劣らない重要性を示すと考えられる文末の表現を巡って考えてゆく。その際特に注目するのは、「御文」各書簡の文体基調を形作ると考えられる助動詞「ナリ」や「ナリ」の上接語句、さらに「御文」各書簡を締め括る語句「アナカシコく」などであって、これらが『五帖御文』においてどの様に用いられ、またどの様な表現効果をもたらしているのかを中心に検討してゆく。なお、今回も論の性格上、引用文が長く

なることがあるため許されたい。

一 『五帖御文』の文末と「…ナリ」について

本節では、まず「御文」における文末の語句の概括的な特徴について、特に『五帖御文』中の例を中心に採り上げ検討する。

文体研究におけるいわゆる文体指標の内、文末は特に、述語型の言語とされる日本語にあつて極めて大きな文体形成要因となっている。例えば、明治期の言文一致運動でも、文末をどの様な語句で言い収めるかが問題となったり、諸家の文章が「デアル体」「ダ体」などと称され分類されたりした事実は有名である^②。もちろん、「御文」は明治期から約四百年遡る室町期の文章資料であつて、直ちに同一視するべきでは無いかも知れない。しかし、同じ日本語文章として文末に注意を向けることは自然であろう。そこで今回は「御文」の文末表現に注目し、具体的には『五帖御文』各書簡について調査検討を行つてゆく。

「御文」各書簡の文末表現として、例えば既に採り上げた有名な『五帖御文』五ノ一〇「聖人一流の章」では、冒頭の一文は「聖人一流ノ御勸化ノヲモムキハ信心ヲモテ本トセラレ候」と、丁寧表現である「候」が用いられている。「候文体」という語句が、あたかも書簡文の代名詞であるかの様に取り扱われることから分かるが、「御文」における「候」の使用は当然とも思われる。また、問答形式の構成を採る「二ノ一」「一ノ一五」などでも「或人イハク…(中略)…不審千万ニ候 御ネンコロニウケタマハリタク候/答テイハクコノ不審モトモ肝要トコソ存シ候へ…(下略)」「一ノ一」などと「候」が用いられている^③。

ところが、これらの書簡では文末が全て「候」となつてはおらず、例えば三つの文から成る「五ノ一〇」の残り二文は「…セシメタマフ」

「…ココロウヘキナリ」であつて、また「一ノ一」でも、前掲した「答
 テイハク…存シ候へ」に続くくだりでは「故聖人ノオホセニハ…オホ
 セラレ候ヒツレ」と一文「候」が用いられるものの、その後は「ソノ
 ユヘハ…マウシツルハカリナリ」サラニ親鸞…キカシムルハカリナリ
 ソノホカニハ…オホセラレツルナリ」サレハ…ナルヘキモノナリ（後
 略）と、むしろ「ナリ体」とするべきかの様相を呈している。

実際、次に掲げる『五帖御文』「三ノ六」「五ノ九」の例などでは「ナ
 リ」がいわば連打するかの様に用いられており、この推論があながち
 不当では無いと思わせる。この「三ノ六」や「五ノ九」が実際の法会な
 どで朗読された場合、聴く者には独特の印象を与えたに違い無い。

夫南无阿弥陀仏ト申ハイカナルコ、ロソナレハ マツ南无トイフ
 二字ハ帰命ト発願廻向トノフタツノコ、ロナリ マタ南无トイフ
 ハ願ナリ阿弥陀仏トイフハ行ナリ サレハ雜行雜善ヲナケステ、
 専修専念ニ弥陀ヲタノミタテマツリテタスクタマヘトオモフ帰命
 ノ一念ヲコルトキ カタシケナクモ遍照ノ光明ヲハナチテ行者ヲ
 撰取シタマフナリ コノコ、ロスナハチ阿弥陀仏ノ四ノ字ノコ、
 ロナリ 又発願廻向ノコ、ロナリ（三ノ六）

南无阿弥陀仏ノ六字ノスカタハスナハチワレラ一切衆生ノ平等ニ
 タスカリツルスカタナリトシラル、ナリ サレハ他力ノ信心ヲウ
 ルトイフモコレシカシナカラ南无阿弥陀仏ノ六字ノコ、ロナリ コ
 ノユヘニ一切ノ聖教トイフモ タ、南无阿弥陀仏ノ六字ヲ信セシ
 メンカタメナリトイフコ、ロナリト オモフヘキモノナリ（五
 九）

ところで、「御文」は形態としては書簡である一方、内容としては言
 うまでも無く真宗の教義を説く仏法教義書、すなわち「内典」である。
 前稿^⑧でも引用した様に、ロドリゲス『日本大文典』には「内典」の文
 体に關して注意を引く記述が見られる。ここで、改めて『日本大文典』
 当該箇所文末についてのくだりのみを確認する。ちなみに前稿では、
 ロドリゲスの文頭についての指摘が「御文」にも良く当て嵌まること
 を確認した訳である。

○この文体では、一般に文末に次の助辞を用ゐる。即ち、*Ar.*（有
 り）、*Nari*（なり）、*Mono nari*（者也）、*Coto nari*（事也）、など^⑨。

短い引用であるけれども、この記述からロドリゲスも「内典」＝教
 義書（当然「御文」も含まれる）の文体を形作る要因として文末に注
 目していたことが分かる。引用箇所では、教義書の代表的な文末表現
 の具体例として「あり」「なり」「ものなり」「ことなり」の四つが採り
 上げられている。

では、ロドリゲスのこの指摘は「御文」にも当て嵌まるものであろ
 うか。結論から言えば、これらの内『五帖御文』では後三者「ナリ」
 「モノナリ」「コトナリ」が比較的によく用いられており、ここでもロ
 ドリゲスの観察がほぼ当を得たものであったことが見て取れよう。な
 お、『五帖御文』における「有り」の例はと言うと、次に掲げる、

コレニツイテコ、ニ愚老一身ノ述懐コレアリ（四ノ一三）

など少数が認められるが、後述する様に「…ナリ」「…モノナリ」「…
 コトナリ」の文末が目立って多い。次に、『五帖御文』でのそれらの例

を掲げておく。

ソノユヘハ如来ノ教法ヲ十方衆生ニトキキカシムルトキハ タ、
如来ノ御代官ヲマウシツルハカリナリ サラニ親鸞メツラシキ法
ヲモヒロメス 如来ノ教法ヲワレモ信シヒトニモオシヘキカシム
ルハカリナリ（一ノ一）

コノユヘニフカク弥陀ヲタノミ後生タスケタマヘト申サン女人ハ
ミナク極楽ニ往生スヘキモノナリ（五ノ二〇）

マツ人間ハタ、ユメマホロシノアヒタノコトナリ 後生コソマコ
トニ永生ノ楽果ナリトオモヒトリテ（一ノ一〇）

これら「…ナリ」「…モノナリ」「…コトナリ」が多く用いられると
いうことからすると、文末に着目した文体分類を行う場合、やはり
《「御文」は「ナリ体」である》^①と言えそうである。

さて、右の様な「…ナリ」の文末は、上接語を問わず一括すると『五
帖御文』全体で五八五例を数える。平均すると、各書簡一通当たりで
七回以上「…ナリ」の文末が現れていることになる訳である。これに
対し、例えば「…ゾ」の文末は平叙文の場合で一四例^②、疑問・反語文の
場合を含めても六二例と、「…ナリ」の十分の一強の数に過ぎないか
ら、「御文」における「…ナリ」の優勢の程が窺える。ここから、やは
り「御文」の文末には「…ナリ」が用いられることが多い」と述べて
も差し支え無さそうである。

以上、本節では「御文」の文末の概括的な特徴について、特に『五
帖御文』の例を中心に検討し、「…ナリ」の文末が最も目を引く傾向の

一つであることなどを述べた。

二 『五帖御文』の「モノナリ」「コトナリ」

本節では『五帖御文』各書簡中の「…ナリ」の文末の内、前述の様
にロドリゲスも特に「内典」^③ 仏法教義書の文末典型として例示する
「…モノナリ」「…コトナリ」について検討する。

まず、前稿に倣い『五帖御文』の他、親鸞聖人の消息、『歎異抄』、
さらにギリシタン文語教義書とされる『サントスの御作業』『ヒイデス
の導師』『スピリツアル御修行』の各資料について「ものなり」「こと
なり」の用例数を表として示す。

スピリツアル御修行	407	3	2	630	855	407
ヒイデスの導師	12	24	16	4	17	12
サントスの御作業						
歎異抄						
親鸞消息						
五帖御文	125					
ものなり						
ことなり						

この表から分かる様に、『五帖御文』
では「…モノナリ」が「…コトナリ」
の約五・七倍に上っており、百分率で
示せば「…モノナリ」八五・〇三%、「…
コトナリ」一四・九七%となる（ちな
みに、『五帖御文』の「…ナリ」全体と
の関係からすると、五八五例中「…モ
ノナリ」の占める率は二一・三七%、
「…コトナリ」のそれは三・七六%とい
うこととなる^④）。つまり、『五帖御文』
にあつては「…モノナリ」と「コトナ
リ」の用例数を比較すれば「…モノナ
リ」の方が遙かに勝っている訳である。
なお、この傾向は表を見るとギリシタ
ン教義書でさらに著しいものとなつて

いる。逆に、親鸞消息と『歎異抄』とでは、「ことなり」の方が「もの

なり」よりも多く用いられている（両資料共に「ことなり」が「ものなり」の八倍を数える）。

この差異をどの様に考えるかについては、東辻保和氏の論考⁽¹⁴⁾が参考となろう。東辻氏は上接語の「もの」「こと」が各々有する意味を分析され、それを基に「著者の立場や思想を主張する作品に「ものなり」表現が多くなり、それに対して、事件・事実を客観的に記録ないしは説明・描写する作品には、「ことなり」表現が多くなるのではないかと推論して、中世の種々のジャンルに属する文章資料の「ものなり」「ことなり」表現を精査された。その結果、予想と合致したジャンル（例えば、史論・歴史物語は「ことなり」が多く、「御文」や道元の『正法眼蔵』を包括した「教義書」のジャンルでは「ものなり」が多い、など）もあるが、合致しなかったジャンルもあるとされ、後者の一つに「仮名法語類⁽¹⁶⁾」があったことを述べておられる。ここからすると、「御文」や『正法眼蔵』は「著者の立場や思想を主張する」性格が比較的に強いものと言いうことが出来よう。ところが、やはり仏教思想を説く内容であって、言うまでも無く「教義書」と極めて近い性格を有すると思われる「仮名法語類」では、必然的に「ものなり」が多用されることになるのでは無いか、といった予想に反し、実際には「ことなり」の方が優勢な使用状況を示す述作が多かったという訳である。次に、それらの例を掲げる。

電光朝露の身に一度も悪き態をせんは、浅猿く、をこがましき事也
（明恵上人遺訓・六五―15）

決定往生の信たらずとて人ごとに歎くは、いはれなき事なり

（一遍上人語録・巻下、一二九―10）

非人法師の身に学問無用といふことも分齊あるべき事也

（一言法談・巻上、一九五―10）

東辻氏も、「同じく法語とはいいながら、一概には律しきれないもののあることを知らされる」と述べておられる様に、各仮名法語の「ものなり」「ことなり」の用いられ方についてはより丹念な読解が必要となるう。

ともかく、東辻氏の調査を援用すれば『蓮如御文』においては「ものなり」がその用回数で「ことなり」を圧倒しており、これは『正法眼蔵』にも認められる傾向と考えられる。すなわち『蓮如御文』では「ものなり」一一八例「ことなり」二八例、『正法眼蔵』では「ものなり」五一例「ことなり」〇、ということである。参考として『正法眼蔵』の「ものなり」の例を掲げておく。

ただ坐上の修のみにあらず、空をうちてひゞきおなすこと、撞の
前後に妙声綿々たるものなり。
（弁道話・七六―4）⁽¹⁸⁾

しかあればすなはち、無仏性の道、はるかに四祖の祖宝よりきこ
ゆるものなり。
（仏性・一一七―7）

既に述べた様に『五帖御文』の傾向も、同じく「モノナリ」の使用が「コトナリ」を大きく凌ぐ訳である。ここから『五帖御文』中の「モノナリ」「コトナリ」の例について検討してゆく。次に、用例を掲げる。

真宗ノ正意コノイハレニヨリテアヒスタレタリトキコエタリ カ

クノコトキラノ次第ヲ委細ニ存知シテ 当流ノ一義ヲハ讃嘆スヘ
キモノナリ（四ノ一）

タ、一念ニ弥陀ヲタノム衆生ハミナコトクク報土ニ往生スヘキ
コト ユメクウタカフコ、ロアルヘカラサルモノナリ（五ノ六）

コレヲ念仏衆生ヲ撰取シタマフトイフコトナリ（五ノ一五）

「四ノ一」の例では（勸化には衆生一人一人の宿善・無宿善を分別することが欠かせないにも拘らず、この頃の仏法者はただ訳も無く一方的な教化を行っているために、）真宗の真実の心は逆に廢れているようであつて、正しい勸化のためには以上の子細を詳しく知った上で真宗の仏法讃嘆を行うべきものである、というくだりで「モノナリ」が用いられている。不適切な布教を戒め、人を良く見定めて仏法を説くべきであるという蓮如自身の強い思いが伝わる。

「五ノ六」の例では（真宗の他に色々の宗旨があるけれども、）ただ一念に阿弥陀如来を信仰する衆生は悉く極樂浄土に往生するに決まっているということを、努々疑う心などあつてはならないのである、という叙述の結びに「モノナリ」が用いられている。ここでも、浄土の教えに対する蓮如の確信と、それを衆生に伝え広めようとする堅固な意志が読み取れる。

これら「モノナリ」の例に対して、「五ノ一五」の例では、真宗で「信心を取る」ということがどの様な事態であるのかを説明し、一心に弥陀を信仰する衆生が弥陀の光明に包まれて極樂往生に至る過程が「念仏衆生ヲ撰取シタマフ」ということなのである、と結論付ける、いわば論理の帰着点の箇所「コトナリ」が用いられている。

また、次に掲げる、

コレニツケテモ人間ハ老少不定トキクトキハ イソキイカナル功
徳善根ヲモ修シイカナル菩提涅槃ヲモネカフヘキコトナリ（四ノ
三）

では、一見「人間の生死は見通しの付かないものであると聞くなり、急いでいかなる功德も積み、いかなる信仰をも行うべきだ」と促す様であるが実はそうでは無く、引用箇所の前段で諸国の寺社に参詣の人々が無いことを訝しんでおり、それを承けて「：急いでどんな善根功德も積み、どんな信仰もするはずなのに」と理屈を述べている訳である。以上の例から『五帖御文』における「モノナリ」「コトナリ」の状況は、東辻氏の推論を概ね裏付けると考えられそうである。もともと、次に掲げる、

一向一心ニ弥陀ヲタフトキコト、ウタカフコ、ロツユチリホトモ
モツマシキコトナリ（四ノ九）

の例では、（延徳四（一四九二）年の疫病流行を目の当たりにし、この様な時はいよいよ阿弥陀仏を深く信仰して極樂に往生できるのだと確信して）、「ひたすらに弥陀を尊いこととして、疑う心など露塵ほども持つてはならないのである」と、「モノナリ」の用いられている「四ノ一」「五ノ六」の例と違いの認め難い文脈で「コトナリ」が現れている。なお精査が必要であろうが、少なくとも「四ノ九」の「コトナリ」の例も、言ってみれば「御文」そのものの有すると想定される「著者の立場や思想を主張する」文章としての性格には背反せず、むしろ合

致するものと考えられることも出来そうである。

以上、本節では『五帖御文』各書簡中の「モノナリ」「コトナリ」について検討し、使用数において「モノナリ」が極めて優勢であることを確認した。また、この検討結果は「御文」固有の性格である「仏教思想を説き、力強く真宗への信仰を促す」という各書簡の内容と密接に関連するものであろうことをも推論した。

三 『五帖御文』の「ベキモノナリ」附「アナカシコく」

本節では、前節までの検討結果を踏まえた上で『五帖御文』各書簡中に用いられた「モノナリ」の上接語句に注目し、とりわけ「…ベキモノナリ」の用例の多さについて検討を加えてゆく。併せて「ベキモノナリ」と「御文」各書簡を締め括る文句である「アナカシコく」の意味機能との関係についても述べる。

先述のように「御文」における「モノナリ」の用いられ方には、筆者である蓮如の主張（それは取りも直さず真宗の教義そのものである）を押し出すという側面が認められよう。この側面は当然「御文」の有する教義書としての性格を反映している、ということとなるはずである。さらに、「御文」の「モノナリ」には、助動詞「ベシ」の連体形を上接させた「ベキモノナリ」およびその否定形と考えられる「ベカラザルモノナリ」が少なからず用いられている事実注目したい。例えば、既に掲げた『五帖御文』の例から、重複を避けて引用順に書簡番号のみ掲げると「ベキモノナリ」の例が「五ノ一〇」「五ノ九」「五ノ二〇」「四ノ一」「ベカラザルモノナリ」の例が「五ノ六」などとなる他、次に掲げる、

仏恩報謝ノタメニハツネニ称名念仏ヲ申シタテマツルヘキモノナ

リ（二ノ一三）

タ、南無阿弥陀仏くトコエニトナヘテ ソノ恩徳ヲフカク報尽申ハカリナリトコ、ロウヘキモノナリ（三ノ四、以上「ベキモノナリ」の例）

コノホカニナヲ信心トイフコトノアリトイフ人コレアラハオホキナルアヤマリナリ スヘテ承引スヘカラサルモノナリ（二ノ二）

一念ニ弥陀如来今度ノ後生タスケタマヘトフカクタノミ申サン人ハ 十人モ百人モミナトモニ弥陀ノ報土ニ往生スヘキ事サラくウタカヒアルヘカラサルモノナリ（五ノ二、以上「ベカラザルモノナリ」の例）

など容易に多数の例が指摘できる訳である。

実は、『五帖御文』中で文末に用いられる「モノナリ」の内、「ベキモノナリ」「ベカラザルモノナリ」の用例数は、

「ベキモノナリ」： 九三例

「ベカラザルモノナリ」： 一六例

と、合わせて一〇九例で「モノナリ」中八七・一六%を占めている。これは、前節で触れた『正法眼蔵』には見られない特徴であって（『正法眼蔵』では、「ものなり」五一例中「ベキものなり」「ベカラざるものなり」は共に三例で、合わせても六例と全体の一一・八%に過ぎない）、東辻氏は「両者を単純に比較することは許されない」としながらも「しかしながら、右に見る限りにおいては、『蓮如御文』が、より強い規範性（衆生の帰依要求）を伴う表現となっている点は認められる

であろう」とされている¹⁹。本稿もこの指摘に従うが、やはり宗門護持発展のために広く不特定多数の人々に訴えかけねばならないという「御文」の性格上、また拙稿²⁰で述べた様に極めて積極的に勸化を推し進めていった蓮如その人の性格上、「御文」が「モノナリ」なかんづく「ベキモノナリ」「ベカラザルモノナリ」に代表される「より強い規範性」を帯びることとなったのはある意味で必然的であった、と言えるかも知れない²¹。さらに、「御文」各書簡中で「ベキモノナリ」の用いられた箇所を目を向けると、この印象は一層強まると思われる。

良く知られる様に、「御文」各書簡の最後は「アナカシコく」で結ばれる。この「アナカシコく」の直前の文は、次に掲げる、

シカレトモ帰スルトコロノ弥陀ヲステ、タ、善知識ハカリヲ本ト
スヘキコトオホキナルアヤマリナリトコ、ロウヘキモノナリ
アナカシコく（二ノ一一）

ヨクくオモヒハカラフヘキモノナリ アナカシコく（三ノ一〇）

後生タスケタマヘト申サン人ヲハ カナラス御タスケアルヘキ事
サラくウタカヒアルヘカラサルモノナリ アナカシコく（五
ノ一九）

などの例の様に「ベキモノナリ」「ベカラザルモノナリ」という文末になつていふことが多い。『五帖御文』について言えば、「アナカシコく」の直前に「ベキモノナリ」「ベカラザルモノナリ」が来る書簡は全八〇通中五七通（内訳は「ベキモノナリ」が来るもの五四通、「ベカ

ラザルモノナリ」が来るもの三通）、七一・二%に上る。実は、前掲の「五ノ六」「五ノ九」の例や、本節で掲げた「二ノ一三」「三ノ四」「ベキモノナリ」・「二ノ二二」「五ノ二」（「ベカラザルモノナリ」）の例なども、実は「アナカシコく」直前のくだりのものである。また、この各書簡の「ベキモノナリ」「ベカラザルモノナリ」五七例は、「ベキモノナリ」表現全体の五二・二九%に上る。さらに、「ベキモノナリ」または「ベカラザルモノナリ」の文末が一度しか現れない書簡は四一通であるが、その一度が「アナカシコ」の直前に用いられている書簡は計三五通（四一通中の八五・三七%）となつている訳である。この数字からも分かる様に、「御文」の各文末の「ベキモノナリ」は、多く各書簡全体の末尾において、それまでの叙述で「サレバ」に代表される様な接続表現の働き²²その他によって展開・総合された論理を一層力強く肯定し、その上で読む者・聴く者に仏法への帰依を促すという極めて重要な役割を担っていたと思しい。

ところで、「御文」各書簡の結句である「アナカシコく」についても、現在の法要で「御文」が読み上げられる際に私たちも感じる荘重さはもちろんのこと、またより実際の・具体的な機能を有していたことが想定される。

現在の国語辞典では「あなかしこ」について、例えば次に掲げる様な説明がなされる。

（おそれ多く存じます、の意で手紙文の文末に用いられて形式化したもの）相手に敬意を表す仮名書状の用語。多く文言の終わりにおかれるがまれに初めにおかれることもあり、男女ともに用いた。恐惶謹言（きょうこうきんげん）。かしこ。かしこ。

（小学館『日本国語大辞典』第二版「あなかしこ」④）

しかし、古代語・中世語の「あなかしこ」には、次に掲げる例の様に命令・禁止の表現を伴って陳述副詞的に用いられたことが知られる。

「あなかしこ。ものゝついでに、いはけなく、うち出で聞えさせ給ふな」などいふも
 (源氏物語・若紫①二二二―一)

「よにいみじき夢なり。…(中略)…あなかしこく、人に語給ふな」と申ければ
 (宇治拾遺物語・卷十三ノ五、夢買人事三六六―九)

荊軻「この事あなかしこ、人にひろふ(矢毛注、披露)すな」といふ。
 (平家物語・卷五、咸陽宮三四九―七)

また、『日葡辞書』の「アナカシコ」の項には、

Anacaxico conocofouo tagaye tamóna. (あなかしこ)この事を違へ給ふな)

という例を挙げた後、

この事をし損じないように注意しなさい。▶また、これは手紙の末尾にするす語である。

と注している。²⁴⁾ここからすると、『日葡辞書』の編まれた頃「あなかしこ」は、少なくとも陳述副詞的な用法と現在の「敬具」「草々」のような文書語的な用法との二つの性格を有していたと考えられる。推論すれ

ば『日葡辞書』から百年余り遡る「御文」の「アナカシコく」には、未だ陳述副詞的な性格が『日葡辞書』の時期よりも濃く残存していても不思議では無い。すなわち、蓮如は「御文」各書簡において、「アナカシコく」直前の「…ベキモノナリ」までで衆生への促しを終えた訳では無く、結びの「アナカシコく」でも念押しをしていた、と言えそうである。「御文」末尾の「アナカシコく」は単に唱読に莊重さを加えるための形式的な決まり文句なのでは無く、直前の「ベキモノナリ」と強く連関してあくまでも衆生の帰依を訴えているかの様に捉えられる訳である。

この「アナカシコく」の陳述副詞的な性格に注目して、もう一度『五帖御文』各書簡の結びを調査してみると、「ベキモノナリ」「ベカラザルモノナリ」を含めて「促し」を行う文末表現(ベキナリ・ベシ・…ナカレ他)が「アナカシコく」の直前に置かれる書簡は八〇通中七六通と、全体の九五%に上っていることに気付く。これはやはり偶然では無く、蓮如上人の積極的な布教態度の表れと見做したい。次に、「ベキナリ」「ベシ」「…ナカレ」が「アナカシコ」直前に置かれる書簡の例を掲げておく。

コレスナハチ当流ノ信心ヲ決定シタル人トイフヘキナリ アナカシコく(二ノ八)

(『観無量寿経』に説かれる提婆達多・阿闍世王・韋提希夫人らをして巡る出来事などは) 不思議ノ本願ニ帰スレハ カナラス安養ノ往生ヲトクルモノナリトシラセタマヘリトシルヘシ アナカシコく(四ノ三)

シカレハ見聞ノ諸人偏執ヲナスコトナカレ アナカシコく（一ノ八）

また同時に、読み上げられる「御文」を聴く人々も、信仰への促しが繰り返し念押しされるため、聴覚のみによっても蓮如の要請を感じ取ることが出来たであろう。この様に「御文」の結びには、実は見逃すべからざる機能が存していたと思しい。

なお、親鸞聖人の消息にももちろん「あなかしこく」で結ばれるものが少なからず存し、その数は岩波「日本古典文学大系」「親鸞集日蓮集」所収の全四三通中二八通（六五・一％）に上る。その中で「あなかしこく」の直前に「御文」と同じ様に命令・促しの文末表現（べく候・べし他）を置く書簡は計二〇通と、「あなかしこく」の書簡全体の七一・四三％に当たる。次に、用例を掲げる。

ただ如来にまかせまいらせおはしますべく候。あなかしこく。
（大系本「九」）

この真実の信心のおこることは、釈迦・弥陀の二尊の御はからひよりおこりたりと、しらせたまふべし。あなかしこく。（同右「三三」）

この「親鸞消息」の調査結果も、書簡文中で「あなかしこ」の有する役割について「御文」の数値ほどでは無いかも知れないけれども、やはり示唆を与えるものと思われる。

以上、本節では主に『五帖御文』各書簡中の「…ベキモノナリ」について、書簡末尾に現れる例を中心に検討し、これらの「ベキモノナ

リ」が蓮如の主張の確認と書簡の受け手である衆生への信仰の促しという働きを受け持っていることを推論した。同時に、各書簡を結ぶ「アナカシコく」も、「ベキモノナリ」と結び付いて衆生への帰依を繰り返し求める役割を担っているであろうことを述べた。

おわりに

今回は、『五帖御文』各書簡の文末表現に注目した。中心をなすのは「…ナリ」であって、『五帖御文』の文体基調を形作っていると見える。「…ナリ」表現の内、多く用いられる「…モノナリ」さらに「…ベキモノナリ」については、受け手に対し仏法の要義を説くと共に信仰を強く促すという「御文」固有の性格の一つの現れであることを推論した。さらに「…モノナリ」なканずく「ベキモノナリ」は、書簡を締め括る「アナカシコく」とも呼応して信仰への促しを確実に念押しするものとなっていると考えられる。

注

(1) 拙稿「蓮如「御文」の語学的検討—(一)導入—」(『久留米大学文学部紀要 国際文化学科学編』第三十二・三十三合併号、平成二八(二〇一六)年九月)・「同—(二)文章構成—」(『同』第三十四・三十五合併号、平成三〇(二〇一八)年九月)・「同—(三)文末—」(『同』第三十六号、令和元(二〇一九)年九月)。

(2) 山本正秀氏「近代文体発生の史的研究」(岩波書店、昭和四十(一九六五)年)・「言文一致の歴史論考」(桜楓社、昭和四十六(一九七二)年)など参照。

(3) 現在、浄土真宗本願寺派の「御文」(本願寺派では「御文章」と称する)朗読においては各文末をやや伸ばし気味にするが、これは聴く者にとり極めて印象的であって、それだけ文末の語句が耳に残る効果をもたらしていると言えよう。

- (4) 拙稿「蓮如「御文」の語学的検討―(一) 導入―」(注(1) 参照のこと)に挙例。
- (5) 「候」など「御文」における敬語使用については、藤原徳悠氏「蓮如上人「御文」の敬語表現」(和泉書院、平成十三(二〇〇二)年など参照のこと)。
- (6) 中村元氏「宗教書としての『御文章』の文章形式」(浄土真宗教学研究所編『蓮如上人研究教義篇Ⅰ』永田文昌堂、平成十(一九九八)年所収)でも、「御文」を文末形式から見た場合『ナリ体』と捉えられることが指摘される。
- (7) もちろん、注(3)に述べた朗読の効果も併せ考えられよう。
- (8) 拙稿「蓮如「御文」の語学的検討―(三) 文頭―」(注(1) 参照)。
- (9) 土井忠生氏訳『ロドリゲス日本大文典』(三省堂、昭和三十(一九五五年) 六六二頁)。
- (10) 「ソレオモンミレハ人間ハタ、電光朝露ノユメマホロシノアヒタノタノミシツカシ」(一ノ一一)など。
- (11) 「カヤウノ雨山ノ御恩ヲハイカ、シテ報シタテマツルヘキツヤ」(三ノ四、疑問文)など。
- (12) 注(8)に同じ。
- (13) この他『五帖御文』の文末表現では「:コ、ロナリ」五〇例「:ベキナリ」四一例「:バカリナリ」二四例などが目立つところである。
- (14) 「中世における「ことなり」「ものなり」表現について」『国語史への道 土井先生頌寿記念論文集上』三省堂、昭和五十六(一九八二)年。後『もの語彙こと語彙の国語史的研究』汲古書院、平成九(一九九七)年に所収。
- (15) 東辻氏は道元『正法眼蔵』(岩波『日本古典文学大系』『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』所収)・蓮如御文(岩波『日本思想大系』『蓮如一向一揆』所収の七八通、因みにその内四〇通は『五帖御文』からの抜粋)などがこれに当たるとされる。
- (16) 東辻氏は岩波『日本古典文学大系』『仮名法語集』所収の「明恵上人遺訓」・「一遍上人語録」・無住「妻鏡」・「一言芳談」および『正法眼蔵随聞記』(注(15)に同じ)について「仮名法語類」として検討され、この内「妻鏡」を除き全てが「ことなり」優勢であったという。
- (17) 注(14)に同じ。
- (18) 以下、「御文」を除く引用例は全て岩波『日本古典文学大系』本によった。

- (19) 注(14)に同じ。
- (20) 「蓮如「御文」の語学的検討―(二) 導入―」(注(1) 参照) 参照のこと。
- (21) このことと関連して、比較に採り上げた親鸞聖人の消息や『歎異抄』では「ことなり」が「ものなり」を圧している点について付言すれば、例えば「詮ずるところ、ひがごまふさんひとは、その身ひとりこそともかくもなりさふらはめ」(大系本「二九」)という消息の言葉に見られる、浄土の教えを誹謗中傷する者たちへの一種突き放した様な態度からも窺える様に、親鸞は蓮如と対照的に「宗門」を護持発展させる必要も意思も無い立場であったこともあり、より信仰への要求に繋がり易い「ものなり」に比べると客観的な叙述態度に結び付く表現である「ことなり」の方がより多く用いられることとなった、とも考えられそうである。
- (22) 「御文」の「アナカシコ」については、中村元氏注(6) 文献の他、大喜直彦氏「蓮如の書状・御文・裏書を考える―中世後期の文書の世界」(浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座 蓮如』第二巻所収・平凡社、平成九(一九九七)年所収)・佐竹昭広氏「御文様」(『文学』四一ノ四、昭和四十八年四月)「あなかしこ」(『同』四一ノ五、昭和四十八年五月)などにも詳しく論じられている。
- (23) 注(1) 拙稿参照のこと。
- (24) 土井忠生氏他編『邦訳 日葡辞書』(岩波書店)によった。